

計量生物学への想い
寒水孝司 (京都大学)

日本の計量生物学がもっともっと発展してほしい。当たり前のことであるが、これが計量生物学への私の想いである。では、なぜ発展を望むのか。それは、おそらく、計量生物学が単純に好きで、気が付いたらこの分野にいる、というのが理由だろう。ワールドカップで日本代表を応援する理由と同じかもしれない。ただし、それだけでは理由として不十分で、この(「計量生物学の未来に向けて」という)シリーズで述べるべきことは、普段の研究や教育の観点から計量生物学の現状や問題を俯瞰し、その将来を展望することだろう。そうすることで、現状の問題が整理・共有され、計量生物学が進む道のひとつの可能性が示唆されるかもしれない。しかしながら、そういった定石的な姿勢はどうも苦手なので、ここでは、医療統計をとりまく環境の 15 年後の希望的将来像を想像してみることにした。いずれについても、「そんなこと無理に決まっている」、「そうやってどうする」、「そのために何をやる」、「なぜ 15 年後なのか」といった意見・批判が聞こえそうであるが、あくまでも希望的(空想的?)であることを強調したい。ひとつでも実現していれば、日本の医療統計学、ひいては計量生物学の未来は明るいのではないだろうか。

(1) 日本のすべての医学部に医療統計関係の講座が設置される

医療統計関係の講座・研究室が増え、本分野の基盤が強固になってほしい。たとえば、現在、文部科学省管轄の医学部は 79 あるので、これらの医学部に医療統計関係の講座が設置され、教員が 2 名ずつ配置されれば、教員だけで全国 150 名以上になる。これにより、医学分野の研究を網羅的に扱うことができる。さらに、医療統計の専門家を志す学生の多くが製薬企業への就職を希望しているが、研究・教育者として大学に残ることを希望する学生も増えてくるだろう。公務員、運営費交付金の削減が続く現状を踏まえると、かなり高い壁ではあるが、その実現に向けて、医学分野への貢献、研究者相互の交流を推進し続けなければならない。

(2) 医薬品医療機器総合機構(PMDA)の生物統計担当審査官が 30 人を超える

昨年の 12 月に濱崎俊光先生(大阪大学)が FDA の H. M. James Hung 氏と連絡をとり、アメリカ食品医薬品局(FDA)の生物統計部門のセミナーで研究発表の機会を与えてくれた。そこで、1 時間という短い時間であったが、FDA の統計担当審査官と研究内容について議論することができた。また、日本人審査官の石田詠二氏から業務内容などについて話を伺うことができた。このような経験から、FDA の規模の大きさを肌で感じることもできた。現在、FDA の統計担当審査官は約 100 名とされているが、PMDA はその 10 分 1 程度にすぎない。半分までとはいわないが、3 分の 1 程度にならないだろうか。承認審査体制の拡充強化のために、単純に人数を増やせばよいわけではないが、各審査官がこれまで以上に研究の時間を確保できるような環境の整備が必要である。日本計量生物学会の年会で、毎年、審査官による発表のセッションが組めれば、年会はますます盛り上がるだろうし、会員数の増加にもつながるはずである。

(3) 日本計量生物学会の会員数が 1,000 人を超える

現在の会員数は 500 名弱(2010 年 5 月時点)である。会員の増加数は 1980 年からの 20 年間で約 100 名、その後の 10 年間で約 100 名である。このまま増加傾向が続いても、一年あたり 10 人しか増えない。そうすると 15 年後には、会員数は(150 人増えて)650 名くらいになる。ちなみに、アメリカは 2,000 名を超えていて、日本統計学会は 1,450 名(2010 年 10 月時点)である。規模が大きいことが必ずしも望ましいわけではないが、学会の活動が高ま

った結果として、会員数は4桁以上になってほしい。そのために、身近なところでは、製薬企業の統計家には全員会員になってほしい。実際のところ、企業の統計家から「会員になってもあまりメリットがない」という意見をよく耳にするが、学会活動を通じて、自分自身の専門分野の学問・社会的価値を高めることは必要ではないか。そうすれば、社内での試験統計家という立場も今より高くなるのではないだろうか。一方、学会としては、学問的研究を推進・普及するとともに、研究手法・成果の利用者を支援する機能の充実化を図る必要があるだろう。

さらに、上記の3つの希望的将来像に加えて、次のような目標が考えられる。

- すべての特定機能病院に医療統計の専門家が配置される
- コンサルティング専門の統計グループを有する製薬企業の数が20以上になる
- Biometrics 誌や Statistics in Medicine 誌への日本人著者の論文数が増える(たとえば、日本人著者の論文が各号で最低1報掲載される)

最後に、本稿で述べたことは、あくまでも希望的将来像であり、計量生物学に関わる先生方のさまざまな意見や教えに依るところが大きいことを改めて強調したい。具体的に数値を示したのは、話に面白みをもたすためである。冒頭で述べたように、計量生物学が単純に好きだから、日本の医療統計をとりまく環境の明るい将来を想像してみた、というのが話の趣旨である。もちろん、どのような将来であれ、計量生物学の明るい未来に向けて、微力ながら、医療統計学を通じて、計量生物学の発展に貢献していく所存である。私の師である吉村功先生(東京理科大学)の「外国(とくにアメリカ)と対等な関係で働ける統計家を育てたい」という想いを継承するためにも、まずは、私自身がそのような統計家にならなければならない。